

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	開所より地域との連携の中で、人権を大切に共に喜びあえる信頼の介護を理念としてきた。職員は、毎年介護目標を立て日々の支援に取り組み、理念を実践につなげている。	ホーム独自の理念が誰もが見やすい事務所窓口上に掲げられている。理念を具体的に達成するため、毎年、目標を立てている。今年度は職員皆の気持が入った「共に喜びあえる」を目標とし職員トイレにも張り意識づけをし、スタッフ会議等で確認している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	施設の一部はオープンガーデンとして開放している。恒例のサンまつりには、地域の多くの方々の参加がある。避難訓練に駆けつけて下さるご近所様は顔なじみになっている。季節のくだものやお花の差し入れなど地域の人々との交流がある。	代表者が長年住んでいる場所柄から地域の人々とのつきあいも自然に行われている。災害時に駆けつけていただく近所の方は利用者の顔や名前も分かる程、親密な間柄となっている。8月恒例の「サン祭り」は地区の行事ともなっている。小学5～6年生が「地域を学ぶ」という授業の一環で1年間来訪したり、障害児の体験活動(ぶれジョブ)なども受け入れている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	入所申し込みを訪れた方より相談があればその状況に合わせて小規模多機能施設の紹介をして、選択肢が広がるように支援している。理事長は地域住民の集まりに出向き、認知症の人の理解、介護の相談にのっている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議は年6回実施している。運営理念の理解、利用者の状況、事業の様子を報告している。協力を得て避難訓練を実施した。複数のご家族の参加もあり、施設の理解につなげている。	会議は隣接の小規模多機能型居宅介護事業所と合同で年6回開催されている。家族、区長、民生委員、市職員が参加し、会議の内容によっては消防団員も出席している。利用状況や活動報告、行事の様子、今後の予定など議題に沿って話し合っている。11月には平均介護度が上がり、車椅子対応でのお風呂の問題などが提起されている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議で施設の状況を報告する他、行事に参加して実際を確認していただいている。市の介護相談員の訪問を受けて、利用者、施設の様子を確認した感想をいただいている。	市主催で開催される「口腔ケアや感染症」の勉強会に職員が出席したり、毎月のケアマネージャーの会議にも出席している。介護認定更新時には認定調査員が来訪するので家族了解の下情報を提供している。調査時に家族が同席することもある。介護相談員も2名来訪し、利用者で面談した後、感想などを述べている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束をしないケアを心がけている。状況によりペット柵が必要な時は、家族の理解を得て実施している。隣接する施設と協力して通路を開放しており、利用者や職員は、自由な行き来がある。	外出傾向の利用者も「家に帰る・・・」と職員に話しながらもホームの庭で満足することも多いので玄関を施錠することはない。ペット柵を必要とする利用者には市の指導に基づき家族の承諾をいただき、毎月職員でカンファレンスし記録に残している。隣の小規模多機能型居宅介護事業所との渡り廊下は常に開かれており、お互い自由に往来し、時にはお茶を飲んでくることもある。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	人権を大切にするを理念に掲げて取り組んでいる。研修に参加して学習の機会を持ち理解を深めている。職員は互いに日ごろから言葉使いには意識して注意している。		

グループホームサン・オアシス

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度を活用している利用者がいた。後見人や家族との関わりを通して学ぶ機会があった。研修会の参加と施設内研修を実施して更に理解を深めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約内容の説明には、静かな環境で落ちついて話ができるように配慮している。質問や介護への要望を確認している。料金の改定など、変更のある時は文章でお知らせしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族が面会や行事、運営推進会議に来所した際、管理者や職員は積極的に話す機会を持ち、意見や要望を確認している。市の介護相談員の訪問では、利用者一人ひとりと話しをして頂く機会がある。意見や要望は、スタッフ会議で検討してサービスに反映している。	週2～3回、ホームに来訪する家族もいるが少なくとも月1回は訪れている。独居からの利用者には遠縁の方が誕生会に出席している。家族会の「里の会」が敬老会や七夕に合わせ開催され食事を共にしながら家族の意見・要望を聞いている。家族から要望の上があったお風呂の件も来春改修する予定となっている。毎月発行の「サン便り」にはホームでの様子が顔写真入りで載り、職員の異動なども掲載され家族に送られている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者は職員と同じ業務にあたり、同じ立場、目線で意見や提案を受け止めている。意見や提案は、スタッフ会議で話し合い決定している。	月1回のスタッフ会議には代表者も参加し、職員全員参加で午前中に行われている。ケアカンファレンスは別の日に開催され家族や利用者が参加することもある。会議の間は職員OGのボランティアが利用者の支援をしている。職員はキャリアパスの一環として目標を定め、自己評価を行い、年3回管理者と話し合っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	理事長は、職員の意見や要望を前向きに検討して改善に努めている。職員が働きやすい環境作りに積極的に取り組み、利用者に関わる姿勢を示している。職場環境の良さは、職員の勤続年数に表れている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	理事長は、管理者や職員が希望する研修があれば参加を勧めている。また、研修の必要な事をスタッフ会議で職員に話している。研修報告は職員全員が確認して学びを共有している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	ケアマネ会議への参加をはじめ、学習会を通じての交流を深めている。当施設への入居を希望する家族の意向を受けて、施設間の協力体制を整えて、その意向の実現を果たした。		

グループホームサン・オアシス

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	併設の小規模多機能施設からの入所は、普段から交流があり顔なじみの関係作りが出来ている。体験利用を勧める時は、施設利用者との様子や不安、心配なことは何かを知り、安心して利用出来るように見守る配慮をしている。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の状況、思いをしっかりと受け止め、ホームの出来ること、家族に協力して頂きたいことを明らかにして、力を合わせての関係作り心掛けています。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	話しやすい場所にも心掛けて、本人や家族の意見や要望を受け止めるようにしている。話し合いをする中で、ホームの出来ること、出来ないことを確認しながら、解決に向けた対応に努めている。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は、利用者と共に過ごす歳月の中で、支えられ教えられることの多いことを知っている。それを大切に感じており、感謝の気持ちは、言葉にして利用者へ伝えている。			
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	職員は、利用者が家族を想う気持ちを受け止めている。誕生会への参加やカンファレンスに参加して頂くこともある。家族の思いを確認しながら、ホームでの様子を理解して頂き、協力関係が築けるように努力している。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族とお盆にはお墓参りや親戚の家に出掛けている。子供たちの面会の折に一緒にお茶や食事をする場所の提供にも配慮している。また、「昔からよく知っている先生なの」と受診の機会を楽しみにしている利用者もいる。併設する施設がなじみの場所になっている利用者への配慮をしている。	お正月やお盆に泊まりで自宅へ帰る利用者もいる。遠くの兄弟、身内などから誕生日や母の日、敬老の日には、花、手紙なども届いている。以前の職員の子供が美容師としてホームを訪れ馴染みの関係となっている。現在の利用者9人中の半数以上の方が隣の小規模多機能型居宅介護事業所からホーム利用に到った方々で、渡り廊下で往来していたので何の違和感もなくホームに馴染んでいる。		

グループホームサン・オアシス

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者がお互いに気持ちよく関わり合い、支え合えるように、利用者同士の関係に配慮して、席を変えたり、テーブルの配置の変更をしている。気の合う利用者が一緒に過ごすことが出来る場を提供している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	併設の小規模多機能施設より入所された利用者が増えてきている。施設間の自由な行き来や交流により顔見知りの人や、馴染みの場所との関係の継続支援に努めている。利用が終了した利用者家族が来所するその思いに添えるように努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	カンファレンスには、利用者に参加して頂く事もある。利用者の想いや暮らし方の意向、希望などを職員は利用者の立場に立って、活発に意見交換をして、その実現に努めている。	思いや意向は殆どの利用者が表出できる。トイレ介助にも「ごめんね」、「ありがとう」、「わるいね」との言葉が聞かれるという。多くの言葉を発することが出来ないが一言だけの意思表示にも長いおつきあいから職員は読み取ることが出来ている。二者択一で「冷たいの…?温かいの…?」、「お茶…?ジュース…?」などと声がけし目の表情や仕草で把握することもある。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	個々の歴史や暮らし方、生活環境、サービス利用の経過について、出来るだけ情報を頂くように努めている。日々の暮らしの中で、本人から教えて頂くことがある。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	長い年月をホームで生活している利用者も多い。共に過ごす経過の中で、利用者の過ごし方、心身状態、有する力が変化する状況が把握できている。出来ること、出来ないことを職員は確認し支援に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	課題解決に向けて、緊急性のある時など状況に合わせて、家族や本人、関係者と話し合いを持っている。また、カンファレンスでは、職員全員が参加して検討している。カンファレンスの結果を踏まえて、サービス計画を作成している。	職員は毎月のカンファレンスで意見を出し、計画作成担当者がまとめて介護計画を作成している。毎月の職員会議でモニタリングをし見直しも毎月行い、計画は3ヶ月から6ヶ月に1回立て直し家族に伝えている。状況が変わった場合は現状に即し作り変えている。利用者の衣類の整理や不足する物がないかなどを担当する職員は決まっているが、カンファレンス時には全職員で関わりを持つようになっている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	職員はケアの実践の中で、利用者の言動などから気付いたこと、工夫したこと、次のケアにつなげたいことを記録に残している。記録は、カンファレンスやサービス計画の見直しに活かしている。		

グループホームサン・オアシス

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	みとりの介護にある利用者や家族の、日々変化する不安に寄りそい、看護師は昼夜可能な限り不安の軽減に努めている。入院中の利用者のお見舞いと状況の確認、家族からの相談など、状況や要望により対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の民生委員、様々なボランティアの方、ご近所の方々の力を借りて、楽しみのある暮らしの支援が出来ている。髪のカットに訪れる美容師に楽しそうに話しかけたり、鏡に映る姿を嬉しそうに見ている様子もあり、なじみのボランティアに来て頂けるように支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者、家族の希望に添い、主治医を決めている。利用者の状況や家族の希望があれば、受診の付き添い、往診の依頼など、かかりつけ医との関係を継続し、みとり介護の協力も頂けるように連携している。	現在、利用者に係わるかかりつけ医が計6名、協力医も3名でホーム職員が連携をとっている。インフルエンザの予防接種はかかりつけ医の往診の際に行なう利用者もいる。緊急の受診の場合には家族に連絡し職員が同行するが、看護師でもある管理者が窓口として家族への相談・報告を行っている。入れ歯を替える時に、往診専門の歯科医に対応していただくこともある。隣の小規模多機能型居宅介護事業所にも2名の看護師がおり緊急の場合にも心強い。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師は常に利用者の健康管理や状態の変化に対応している。職員は体調の変化に気付いた時は、ただちに看護師に報告している。併設の小規模多機能施設の看護師の協力もあり、支援は充実している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は病院の指示、家族の意向に出来るだけ添うように支援している。利用者の状況に応じては、早期退院が出来るように、地域連携室と連携を図りながら支援している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	多くの方が施設でのみとりを希望している。終末期のあり方については、サービスの導入時に本人、家族の想いを確認している。また、状況に応じてその時々意向を確認して、かかりつけ医と連携して支援している。併設する施設の看護師の協力もある。	運営規定や重要事項説明書にターミナルケアについて明記されている。ホーム利用開始時に看取りに関して家族の希望を聞き、その状況になった時に改めて家族の同意をいただき、医師の協力を得ながら話し合い進めている。今年度10月には家族の希望もあり看取りの条件もそろったので実施した。利用者の平均年齢も88.3歳と高齢であることから殆どの家族がホームでの看取りを望んでいる。職員も看護師である管理者から対処方法についてアドバイスを受けている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急マニュアルに沿って施設内学習を実施している。吸引器の使用方法を全員で学ぶ機会を持った。命の危険性の高い状況は何か、職員がどのような不安を感じているかを把握し学習している。		

グループホームサン・オアシス

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練は、地域の方の協力を頂き、昼夜の想定で実施している。実際に利用者の避難を行ない、利用者個々の状況に応じた避難方法を確認した他、防災訓練ケースをまとめている。地震の時の避難方法を折に触れて確認し学んでいる。	年2回(1回は夜間想定)、隣の小規模多機能型居宅介護事業所と合同で防災訓練を実施している。消防署や地元消防団、区長、近所の方数名が参加し避難訓練を実施し、近所の方には避難後の見守りもお願いしている。訓練の反省から利用者全員が車椅子使用との想定をしたり、出火元によりホームか小規模多機能型居宅介護事業所どちらかの安全な施設に移動することなどの助言もいただいた。地区とは防災についての協定を結んでおり、備蓄(食糧、介護用品)も確保している。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	援助が必要な時、目立たずさりげない言葉掛けで対応に心掛けている。尊厳、権利の尊重の重要な事を理解しているが、状況に応じて出来ない、難しいと感じている職員もいる。更に学びを深めていくこと、注意しながら業務に当たることを確認している。	呼びかけは苗字、名前に「さん」をつけてお呼びしている。言葉がけについて、利用者の動きから直感的に大きめの声を出してしまうこともあるが、臨機に判断し、本人の尊厳を傷つけないよう配慮している。一ヶ所の少々狭いトイレでドアが開く場合があるので「ドアは閉めましょう・・・」と職員は互いに注意を喚起している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	「～は、どうしますか」等の声掛けで、利用者の想いや希望を確認している他、表情行動から意志をくみ取るようにしている。利用者の行動を「どうしましたか」と直ぐにとめて確認するのではなく、見守りし理解していくことも実践している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	「手伝うよ」と声をかけて下さる利用者に、出来る手伝いを見つけてお願いする。毎日の暮らしに基本的な流れはあるが、利用者のペースを見守りながら、要望や状況に合わせて対応に努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	身だしなみは本人の好みや意向により決めている。本人が決められない場合は、その日の気温や状況に合わせて、職員が選ぶこともある。化粧やカツラ等を楽しむ利用者もいる。ボランティアの協力で化粧を楽しむ機会があった。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	野菜の下ごしらえやテーブル拭きなど、一緒に取り組んでいる。馴染みの野菜や果物を見て貰いながら、話題づくりの機会にしている。カウンター越しに料理する職員の姿、並んでいく料理を楽しみにしている様子がある。	利用者の高齢化が進んでおり、おかゆ、ミキサー食、とろみ食など、食形態も多様化し、調理にも時間がかかることから調理専門の職員を雇用し介護職員の負担を軽減している。毎朝バナナやヨーグルト等の乳製品を取り入れている。夕食は買い物時の肉、魚等の食材選びにより献立を決め、お楽しみメニューとしている。誕生日にはショートケーキをトッピングしお祝いしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者の状況に合わせて、食事量や水分量の確認と記録をしている。食事の形態は、咀嚼や飲み込み、むせなどの状況を確認して決めている。利用者の好みに配慮しながら支援している。		

グループホームサン・オアシス

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアは、利用者の出来ない部分を補うようにしている。利用者の状況に合わせて、歯の治療は歯科医の訪問など協力を得ている。口腔内の状態を保ち、場合により歯間ブラシを使用するなど、清潔の支援をしている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	オムツの使用を減らすことは出来ていない。自力でトイレに行ける方の中にも排泄の誘導が必要な時がある。排泄のリズムの確認と利用者の様子を見逃さないことで、タイミング良くトイレで排泄する支援をしている。	大部分の方はリハパンにパット使用で、昼間はトイレでの排泄を大切にしている。夜は生活リズムに合わせてトイレ介助やポータブルトイレを使用している方もいる。利用者が失敗した時にはそれとなくトイレや居室に誘導している。トイレ上部の棚はカーテンで覆われ介護用品が並び素早く対応出来るようになっている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取は起床時から1日を通して不足しないように心掛けている。毎朝食にバナナを取り入れている。おやつには乳製品や水分摂取に心がけている。排便状況の確認と下剤の調整をしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴は利用者の希望を確認して行なうようにしている。清拭、シャワー浴など状況に応じた支援が出来る。併設する施設の浴槽を利用して湯船で温まる事が出来る利用者がいる。利用者全員が毎日入浴することは困難な状況になった。	毎日入浴できるが全利用者が介助を必要としているので1日おきとなっている。車椅子利用者も多く、ゆっくり温まるまでの入浴をしてほしいとの家族からの要望で、現在、隣接小規模多機能型居宅介護事業所の浴槽を利用する方もいる。来春には浴槽の改修も行う予定である。季節の菖蒲、バラ、柚子湯も行っている。足湯を楽しみに隣村の温泉地までドライブを兼ね出掛けている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	休息は利用者の希望に添い支援している。利用者の希望や状況により、自由に休息の時間を過ごしており、夜間の睡眠につなげている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個々の利用者が服用している薬の説明書は、ファイルにまとめて、いつでも確認できるようにしてある。服薬状況、薬の変更や追加は記録して全員が確認している。誤薬の危険性に対応して、声だし確認をしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者の出来る力を活かして、新聞やちり紙たたみ、カーテンの開け閉め等を、自分の役割として取り組んでいる。ボール投げ風船ゲームに力を発揮する人が多い。表彰状の授与など楽しみのある支援に心掛けている。		

グループホームサン・オアシス

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	自由に玄関に出て行く人が、腰をおろして過ごせるようにしている。畑まで行き野菜の様子を見に行く人もいるが、散歩を希望する利用者は少ない。庭に咲く花やリンゴ畑の様子などを伝えて散歩に誘っている。人形博物館やお花見外出など外出の支援は、ボランティア、家族の協力を頂いている。	利用者は、87歳～102歳の方がおり、車椅子の方も半数以上と歩行能力の低下から外へ出ることが難しくなっている。天気の良い日には前庭や中庭で過ごすことも多く、市のオープンガーデンになっているので色々の花を楽しむことが出来る。ドライブではトイレの使える場所を選び、季節を楽しみながらOG職員のボランティアにお手伝いをいただきながら隣村の温泉地の足湯などに出掛けている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を管理している人、また希望する人は現在いない。「お金が無いだよ」と困っている時は、金庫に預かっていることを話して安心を得ている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	敬老の日や誕生日に届く手紙やお祝いを嬉しそうに受け取る姿がある。電話で家族と話が出来るように支援することがある。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	食堂ホールのカーテンは一日中開けてあり、四季を彩る花々や、りんご畑が見える。雪が降る様子を見て会話が盛り上がった。四季に合わせた飾りつけも楽しんでもらえている。空気清浄機を置き、室温や温度にも気をつけている。	WB工法で施行された建物は空気の流れも良く、夏は涼しく、冬は結露も出来ない。吹き抜けで太い梁、高い天井に天窓と明るく快適な造りとなっている。廊下には職員全員の顔写真と利用者個々の写真が張り出され「まだまだ働くよ」、「いつも有難う」等の言葉も添えられている。居間にはクリスマスツリーと梁を目指して登るサンタなどが飾られ、季節を感じさせている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	玄関から自由に出て、椅子に腰をおろして庭を見たり、ウッドデッキに来る猫に自分好みの名前を付け、声を掛けたり顔を近づけたりしている。それぞれ気の合う仲間とおしゃべりや、TVを楽しむ場所になっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	思い出の写真や手作りの置物等が置かれている。好きな動物や花等のポスター、ぬいぐるみを置くことで会話が増えている。ベットの位置を変えて歩きやすさと転倒を防ぐ配慮をしている。	暖かな陽が出窓から差し込む居室には洗面台、クローゼットが備え付けられている。ベットの掛け布団に玩具の鈴を付け転倒防止用になっているが、落ちれば付けるという利用者の楽しみもある。机の上に額に入った家族の写真、壁に般若心経が張られた居室も見られる。暖かな日射しにも関わらずカーテンを閉めた居室もあり、見られたくないという利用者の思いが尊重されている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者の身体状況に合わせて、安全で使いやすいように、トイレや浴室の手すりの増設、畳コーナーをフローリングにかえている。トイレの案内表示を付けて、分かりやすい工夫や、席とシルバーカーの位置も利用者の状況に合わせて出来る支援をしている。		